久松潛一著

新訂 國文學通論

方法と對象

河出書房刊

昭和二十六年九月十日印刷
昭和二十六年九月十五日發行

新訂國文學通論
方法と對象
定價四百八拾圓

著者　久松潛一

發行者　東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出孝雄

印刷者　東京都文京區柳町二六
山元正宜

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八
株式會社　河出書房
振替口座東京一〇八〇二
電話神田(25)三一七四

序

國文學を學ぶものとして、國文學をどう解するか、また如何に學ぶべきかといふことに思を寄せてから長い年月は過ぎた。かつて學窓にありし頃、契沖傳を書き、ひきつゞいて國學の研究に進んだのも、更に上代古典の研究を行ひ、日本文學評論の歴史を跡づけて來たのもこの志の現れである。元來詩歌をよみ物語を味ふことが好きであつた所から入つた國文學ではあつたが、國文學とは何かといふことにかゝはつて、こゝまで來てしまつたのである。日本の精神の上にたち日本學問の傳統にもとづき、更に日本文學理論の歴史の上に基礎をおいて國文學を理解し組織づけようとする私の考へは、年月のたつにつれ、次第に確立して來たのではあるが、いつを果てとなき道程であつて、結局はその精神と方法とを如何に具體的に表し得たかといふことに歸するのであらう。

本書はこのやうな心構のもとに、國文學についての思索と反省とをまとめた論稿四篇を以て組織づけ、更に附篇を添へたのであるが、完成した體系といふよりは展開の道程を表して居ると言へる。第一、二編に於て國文學の方法をとき、第三、四編に於て國文學の對象を說いたとも言へるが、方法と對象とを關聯させ、統一的に見ようとする心構のもとにまとめたのである。第一編

の「國文學の方法と對象」は昭和十一年から十二年にかけてまとめた稿をもとにして書き改めたもので、方法論として今日に於ても大體いだいて居る私見である。第二編も日本文學研究法を論じたものであるが、昭和八九年に書いたものであり、第一編に比して文獻學的方法といふべき點が多い。第三編は日本文學の概說としてその對象性をといて居り、昭和六年頃まとめたが、日本文學の形成過程をとくに至つてゐない。第四編はさういふ點を補ふために昭和十五年頃行つた講演の速記をもとにして手を加へた。第二編以下は國語國文學講座、日本文學講座、國家科學大系にそれ〴〵發表したものに補正を加へた。第一編は一部分は發表して居るが、この組織のもとに發表するのはこれがはじめである。また附篇は國文學通論に關聯する諸問題についてかつて發表したものをまとめたのであるが、第一章は方法論に關するものであり、第二章以下の三章は日本文學の展開に關する諸問題である。

本書をまとめて見て自分の思索の到らない點も多く、考へ直すべき點も尠くないことを感ずるが、それ等は「國文學通論」の續篇としてまとめたく思ふ「文學地理學」「文學史」に於て補正してゆきたいと思ふ。それにつけても日本の重大なる時に當り、本書の如き未完成の試論を刊行するのはおほけない心持もあるが、ともあれ、自分としては全身をこめて取りくんだ論稿であることだけは言ひ得る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なほ本書を武藏野書院で刊行するに對して、同主人の深き情誼に心ひかれる事が多かつたことを記しておく。

昭和十九年七月三十日

久松潛一

新訂國文學通論目次

——方法と對象——

新訂版序……一
序……三
第一編　日本文學の理論及び方法……一
序說　日本文學研究の學問的構造……三
第一章　研究の方法と對象……八
一　研究史……八
二　方法と對象……九
第二章　日本文學の文獻性と傳誦性……二四
一　文獻性と傳誦性……二四
二　日本文學研究と文獻學……二四
一　傳誦學的方法……二七
第三章　歷史、風土と日本文學研究……三三
一　歷史と風土……三三

二　歴史的地盤と文學……三四
三　風土的地盤と文學……三六
第四章　作品研究の方法過程……四三
一　作品論……四三
二　文學の形態……四五
三　文學の樣式……五一
四　解釋と鑑賞と批評……五四
第五章　作家研究と表現論……五九
一　作家論……五九
二　表現過程……六二
第六章　文學の素材、內容、精神……六六
一　文學精神への道……六六
二　文學の素材と內容……六八
第七章　日本文學史の方法論……七五
文學史……七五
二　文學史の區分……七七
三　文學史に於ける回歸と新生……八七
第二編　日本文學研究法……九一

序　說　文學研究法に就いて……九三
第一章　古典學史より見たる研究法の段階……九五
一　古典文學研究法に就いて……九五
二　書誌學的研究とその研究史……一〇三
三　本文批評とその研究史……一〇七
四　註釋的研究と註釋史……一一八
五　批評的研究と批評史……一二四
六　文化史的研究……一三三
七　研究段階の統一……一三八
第二章　日本文學研究の目的と基調……一四一
一　文學研究の目的……一四一
二　民族性と藝術性……一四三
三　文學性と道德性……一四四
四　歷史性と直觀性……一四六
第三章　日本文學研究の具體的な問題……一五一
一　主なる問題……一五一
二　作品研究……一五三
三　作家研究……一

四　時代研究……一五
五　文學素材の研究……一六二
六　文學形態の研究……一六五
七　文學內容の研究……一七一
八　文學史の研究……一七五

第三編　日本文學概說……一七九

序說　日本文學の對象性……一八一
第一章　日本文學の精神……一八四
一　文學の精神に就いて……一八四
二　まこと……一八五
三　「もののあはれ」と「やさしみ」……一九四
四　幽玄と「さび」……一九八
五　「をかしみ」と「なぐさみ」……二〇五
第二章　日本文學の形態……二一六
一　文學の形態とその起原……二一六
二　詩歌形態……二二四
三　小說形態……二二九
四　戲曲形態……二三七

五　自然文學形態……二四一
第三章　日本文學の素材……二四六
一　素材又は內容に就いて……二四六
二　自然の文學……二四七
三　神、國家、信仰の文學……二五一
四　戰爭の文學……二五五
五　戀愛、別離、死の文學……二五九
六　道義の文學……二六三
七　遊びの文學……二六八
結　語　日本文學の不易性と特殊性……二七三
第四編　日本文學研究の諸問題……二七七
第一章　日本文學研究の諸問題……二七九
一　本文と文獻……二七九
二　文體美……二八二
三　文學論に於ける表現の類型……二九二
四　感動の持續と藝術の深さに就いて……二九七
五　日本文學研究に就いて……三〇三
六　日本文學研究の方法に就いて……三一二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　形成……三三三
八　日本文學と人間形成……三三七
第二章　古代中世文學に於ける人間觀……三三七
一　序說……三三七
二　古代文學に現れた人間觀……三三九
三　中世文學に現れた人間觀……三五〇
第三章　近世の文學精神に就いて……三五八
一　日本精神史の意味……三五八
二　日本精神史に於ける近世の意義……三五九
三　復古精神と民族精神……三六〇
四　現實精神となぐさみ、道德性……三六三
五　さびの精神の近世的意義……三六七
第四章　最近世文學に於ける文學精神……三七〇
一　最近世の文學精神……三七〇
二　文學精神の三系列……三七一
三　第一期の文學精神……三七四
四　第二期の文學精神……三七六
五　第三、四期の文學精神……三八〇

第一編　日本文學の理論及び方法

序說　日本文學研究の學問的構造

日本文學を研究する學問についての一般的考察を行ひたいのであるが、はじめに日本文學を研究する學問の名稱としての國文學、等についてのべておきたい。國文學といふのは國文學史といふ場合の國文學のやうに日本文學自體をさす場合もあるが、むしろ自國文學としての日本文學を研究對象として扱ふ學問の意味に解するのが適當である。國語學が自國語としての日本語を研究對象として扱ふ學問であると同樣であり、從つて國文學といふのは國文の學といふ意味となる。たゞ國文學といふ語が文學自體をさすか、文學を學ぶ學問をさすかといふ點にやゝ曖昧である所から日本文藝學といふ名稱も唱へられるに至つた。もとより日本文藝學が唱へられたのは、單に國文學の名稱の曖昧さを救ふのみでなく、獨逸に於ける Literatur wissenschaft の影響もあり、また從來の國文學の有した學問的性格の多面性もしくは混淆性を反省し、批判する所から生じて居る。卽ち書誌學に專らであつて、文學性の考察を本質におかないやうな傾向もあつたのに對する反省として起つた。さうしてそれは國文學の學問的性格に對する反省としても意義があつたのであり、またかういふ點から國文學を解體してゆかうとする見解も現れて居る。またこれに關聯して、日本文學の研究に於ける種々の傾向、たとへば民俗學の立場から國文學や社會歷史派の立場にたつ國文學や文獻學的立場にたつ國文學等も主張されて居る。このやうにして國文學といふ學的名稱に種々の批判が生じて居るが、これは名稱とともに立場、方法もしくは研究部門といふ點とも關

係して來ると言へる。これらの點はこれから考察してゆきたい點であるが、一應國文學といふ名稱のもとに日本文學を研究する學問の性格や構造を考察いたしたい。

さうして日本文學を研究する學問として國文學が成立し得るためにどのやうな學問的構造を有するか、また有すべきかといふ點は、國文學の概論としての大きな課題である。私はかつて國文學をば日本文獻學、日本言語學、日本文藝學の三の部門に分けられ得るのではなからうかといふ點を稱へたことがあるが、これは日本文藝學を中心とするとともに、文學が言語藝術であるといふ點から文學に於ける言語性を尊重し、また文學が文獻として存するといふ點から基礎的意味で文獻性を尊重したために外ならないのである。これにより國文學の學問的性格の一面は示し得ると思はれるが、學問的體系から言へば日本文獻學も日本言語學も獨立に科學として存在し得る性質を有する點からこの分類は國文學の精確な學問的構造を示して居るとは言はれない。むしろ如何なる學問にも特に人文科學に於て共通する性格として、別の觀點から三の方面に分ける方が適當であると思ふ。一は國文學といふ學問の研究史いはゞ學史であり、一は國文學の理論もしくは方法體系であり、一は日本文學の歴史いはゞ日本文學史である。學史の三方面を有機的に統一づける所に國文學の學問的構造が存すると言へる。

三の中、學史もしくは研究史は國文學といふ學問が發生し發達した過程の考察であつて、日本文學の研究を行ふ場合の基礎としてかくべからざるものである。國語學に於ける國語學史といふべきものであり、從來は國文學研究史として扱はれて居り、評論的研究を主とする意味では文學評論史はその中心をなして居る。また對象の上で歌を主とする場合、歌學史となる。日本に於て國文學といふ學問的名稱が生じたのはむしろ明治以降に於てで

あつて、それ以前は、歌學もしくは歌文の學びとして行はれて居る。歌學は日本文學の中、和歌の學問のみをさして居るやうであるが、しかし歌學のみならず、物語を讀み研究することも歌の上達のために必要であるとする所に、歌學は物語の學をも含むやうになつて居る。俊成、定家の歌學には物語の學をも含んで居る。これは中世後期に至つて連歌師によつて歌や物語の研究がなされることにも見られる。

近世になると歌學は歌文の學としてとりあげられるに至り、一層日本文學の學に近づいて來たと言へるし、一方には歌文の學も道の學び、有職の學問、歷史の學問等とともに、廣い意味の國つ學び、もしくは國學の中につつまれて來て居り、その點から歌學としての萬葉集研究も道の學問としての古事記研究の基礎の意味にとれるに至つたが、村田春海その他のやうに歌文の學を獨立に扱ふ立場も存する。近世末には「國つ文世々の跡」といふ書も安永六年に伴蒿蹊によつて著されて居る。此書は日本文章史であるともいへるが、國つ文といふのは廣い意味の日本文學にもなつて來るのであり、日本文學の學の先驅となつて居る。

さうして明治以後ではこのやうな歌文の學や、有職や法制の學等に對して國文學として獨立して來るに至る。

小中村清矩氏は明治十二年十月稿の「我國の古書を學習する說」に「今の世にして歷朝の事實を詳にし、諸般の起原沿革を明らかにせんとする學は他なし、只事と辭とを辯析するの二路有るのみ」とし、これを事實を知るべき歷史の學と、自國固有の言語を學ぶべき國語の學の二とし、制度法律は歷史に屬し、和歌文章は國語に屬するとして居る。いはゞ國文學と國語學とを同一に入れて居る。かういふ方針のもとに明治初期に作られた大學に於て和文學といふ名稱を用ゐ、更に國語學、國文學としてとりあげられるに至つて居る。さうして明治以後芳賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com